九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[083] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10182

出版情報：語文研究. 83, 1997-05-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

添田建治郎著
『日本語アクセント史の諸問題』

平成八年度新村出賞を受けた本書は、日本語アクセントに関する著者の既発表論文のうちから十篇（いずれも改稿や補筆がされている）と新規執筆の二篇とを集めたものであり、各論文はその主題に応じて三部に配されている。

まず、第一部「アクセント文献から日本語アクセント史の解明をめざして」は、「活用語尾の拍内下降音について」「日本語のアクセントを遡る」「日本語のアクセントの成立」「拍内下降を有する語類小考」「重複差声と「上平上」差声」という五つの章からなっている。ここでは、《「日本祖語」のアクセント体系は、一拍語は「◓、◒」の二型、二拍語は「●○、○●」の二型であった。そののちに、「●、○」（一拍語）や「●●、○○」（二拍語）という型をも有する日本語アクセントの「祖体系」が成立した》との説が提出される。そして、そうした立場から、動詞・形容詞の活用語尾の音調の問題や平安末期の◒拍の分布の問題などを統一的に説明しようとの試みがなされている。

第二部は「方言アクセントから日本語アクセント史の解明をめざして」と題し、「萩市見島の方言アクセントをめぐって」「萩市見島の方言アクセントを遡る」「九州諸方言アクセントの系譜について」という三つの章で構成される。はじめの二章では、《見島本村方言の祖体系は京都語の祖体系（名義抄式以前の体系で、九類を区別する）から分派した》との立場に立って、見島の二拍名詞のアクセントについて、時代を遡ったすがたの再構や語類対応の例外の説明などを行なっている。この全二章を受けた三番目の章では、見島を組み込んだ九州諸方言のアクセント系譜論が提示される。

最後の第三部「方言アクセントの実態とその変容」は、「北九州市方言にみられる新たなアクセント変化の傾向」「北九州市内筑前域におけるアクセント変化」「小豆島諸方言のアクセント」「隠岐の方言アクセント―二拍名詞を対象として―」の四つの章でできている。世代間に見られる差異とその原因の考察（北九州市）や小規模な地域内での系譜論（小豆島・隠岐）が取り扱われている。いずれも筆者の精力的な臨地調査の成果である。

（平成八年五月　武蔵野書院　A5判　三五〇頁　一三〇〇〇円）

廣瀬晋也著
『嘉村礒多論』

いわゆる「私小説」を、作家本人の実人生に還元した上でその読みや評価を決定づけていくという従来の研究の在り方は、今日解体されつつあるといえ、時に「私小説の極北」とさえ称される嘉村礒多の「神話」は依然として十全に解消されたとは言い難い。著者はそうした「神話」を排し、本書に於いて嘉村をあくまでも昭和初期の一私小説作家として捉え、彼の小説への方法意識に目を向けることによりその文学の独自性と時代性・可能性と限界とを見極めようとする。そしてその嘉村の私小説の位置から、改めて昭和初期の私小説が内包していた問題へも照明を当てようとする。

論の構成は二部より成り、その第一部は「嘉村礒多文学活動の概括」と題され、嘉村の在郷期の文学観の形成過程と作家として立った後の文学的動向とが様々な観点より広範囲に検討されている。就中、嘉村の哲学及び宗教意識の考察は詳細かつ具体的であり、彼の独特な罪業意識の理解に寄与するところ大と言えよう。第二部「嘉村礒多の位置と方法」に於いては、大正・昭和初期の私小説作家との比較、とりわけ葛西善蔵との徹底した比較検討を通じてその差異としての嘉村の独自性を浮かび上がらせ、また私小説の「告白性」の問題の検討から嘉村独特の〈宗教的私小説〉への志向とそれを実現するための方法意識という新たな視点を示している。この〈宗教的私小説〉というほかない嘉村の方法意識は、嘉村自身の宗教と文学の葛藤、生活と芸術の対立という課題を担うものであるが、そこでは宗教的懺悔では超克できぬ人間の真実を文学的告白によって描き出そうとする志向と、嘉村の個的な罪業感を真宗的な懺悔によって救済したいという志向が二重化されており、いわば「救済」の結節点に於いて「文学」にも「宗教」にも立ち得ない嘉村の自意識の問題が浮き彫りになっている。そこに著者は昭和初期の私小説に通底する自意識の分裂の問題を見出しているが、蓋し卓見と言うべきであろう。

著者の論証の手つきはあくまでオーソドックスであるが、過去の研究の蓄積の上に積み上げられた確固たる建築の感があり、今後の嘉村研究に於いて踏まえらるべき必携の一冊であると言えよう。

（平成八年十月　双文社出版　A5判　五八一頁　九三一〇円）

南里みち子著

『怨霊と修験の説話』

本書は、中古中世を通じ験力著しい修験僧としてその名を知られた浄蔵の伝を中心に、それと関わる天神縁起や修験道関連の説話について考察した著者の論考をまとめたものである。構成は次にあげる通り。

序章　一、『北野天神縁起』とその研究　二、天神信仰と善家父子の役割
菅公怨霊説話成立の背景　一、「天神縁起」の尊意・浄蔵法験説話　二、『将門記』忠平あて書状の性格　三、『歓喜天霊験記』の説話
日蔵上人の説話　一、日蔵蘇生の説話　二、日蔵とその活動基盤
松尾明神の説話　一、松尾明神と法華経　二、松尾明神と怨霊信仰　三、松尾明神の性格
治病の説話　一、怨霊調伏の説話　二、浄蔵の医術
蘇生説話　一、浄蔵伝の蘇生説話　二、死者を蘇生させた人々
浄蔵と晴明伝承　一、清行蘇生説話の成長　二、清行・浄蔵と陰陽道　三、浄蔵および晴明伝承の類似
『地蔵菩薩霊験記』の浄蔵説話　一、『地蔵菩薩霊験記』と浄蔵伝　二、浄蔵と地蔵信仰
浄蔵止住の寺　一、二つの般若寺　二、浄蔵をめぐる修験集団　三、雲居寺と浄蔵
泣不動の説話の成立と展開　一、「泣不動ノ縁起ノ事」　二、証空と余慶　三、泣不動の説話の展開相
文殊化現の説話　一、文殊化現の説話とその基盤　二、聖・上人の

文殊信仰　三、化人にためされた人々
飛鉢説話の基盤　一、飛鉢説話の問題点　二、飛鉢伝説と鑑賞　三、飛鉢説話の起源

浄蔵の伝としては、本書で取り上げられている如く三善為康の『拾遺往生伝』中巻のもの、及び『大法師浄蔵伝』がよく知られている。著者はそれらを基本としながらも多方面に亙って資料を博捜、時代・場所などにより様々な顔を見せる修験僧浄蔵の姿を浮き彫りにし、説話成立の背景を解読していく。その結果、「浄蔵の活動の一面をとりあげたにすぎない」と著者が述べるにもかかわらず、読者に「修験道が日本文化に及ぼした影響の根深さ」をあらためて印象付ける内容となっている。

（平成八年十一月　ぺりかん社　B6判　二七〇頁　二七六〇円）

今井源衛校訂・訳注　中世王朝物語全集7
『苔の衣』

本書は、鎌倉時代中期に成ったと思われる、所謂〈擬古物語〉の代表作の一つ『苔の衣』についての、本邦初の懇切な注釈書である。『苔の衣』は、『古典文庫』や『鎌倉時代物語集成』に既収であるが、いずれも翻字のみであり、物語研究者以外には馴染みの薄い作品であった。それが、本書を機に、誰もがその全貌に容易に迫ることが可能となったのは喜ばしいかぎりである。

底本は、学界未紹介の伊達市開拓記念館蔵本。本文に問題のある場合は、尊経閣文庫本（複製あり）や穂久邇文庫本（『古典文庫』に翻字）以下一〇本ほどを参照して、校訂がなされる。読みやすさに配慮した整訂本文の下には、平易・流暢な現代語訳が二段組みで配され、通読に最適の体裁である。

注は、全四巻の各巻ごと、後ろにまとめて掲げられるが、著者も編集委員を務める本全集の方針に則り、引歌や引詩といった典拠の指示にとどめ、所謂〈物語取り〉の指摘については省かれる。読者は、『源氏』や『狭衣』を念頭に、沈黙のむこうにあるはずの、数々の模倣・摂取のあとを、自分なりに見出してゆくのも、一興であろう。

〈源氏学者〉としてつとに高名な著者には、ごく初期の論文に、じつは『苔の衣』についての先駆的研究がある（「日本文学」一九五四年一〇月号。『王朝末期物語論』（一九八六年、桜楓社）に改稿再録）。それから四〇年余りを経て、今般、本書の刊行となったのも、著者と『苔の衣』との、浅からぬ因縁というべきであろうか。

（平成八年十二月　笠間書院　A5判　三三二頁　四六六〇円）

九州大学国文学研究室編
『松濤文庫本　熊野の本地』

本書は、九州大学文学部松濤文庫蔵『熊野の本地』を原寸カラー版で影印、翻字・解説を付したものである。原本は縦三一・六糎、横二三・二糎の大型奈良絵本で、江戸時代初期頃の製作にかかると思われる。

『熊野の本地』の伝本は現在数種類の系統に分類されているが、物語の詞章において、松濤本はそのいずれの系統にも属さず、しかも全く独自の詞章を持っているわけでもないという。即ち、ある一つ

の系統の詞章を中心としながら、それに他の数種の系統の本文や和歌を取り込んだ、いわば複合本文とでも言うべき形態を有する一本である。また、奈良絵本と言えば古雅で素朴な描写と鮮やかな彩色の挿し絵が作品の大きな比重を占めるが、松濤本には二面から三面に亙る連続画面が多く見られ、絵巻物を彷彿とさせる。巻末に岩松博史氏の翻字と詳細な解説を付す。

（平成九年二月　勉誠社　菊倍判　カラー一〇八頁　付録翻字・解説頁　一五四五〇円）